



ありがとうございました

川という視点で書いてみたいと思います。

旭川に着任して約 2 年。この間、旭川市内はもとより道北各地にできるだけ足を運びながら、地域経済の現場を確認してきました。その過程で感じたことは、折に触れて本コラムにも書いてきました。今回は、道内の広域エリアからみた旭

川という視点で書いてみたいと思います。先日、稚内市に出張しました。水産加工会社の社長に話を聞くと、米国の関税政策のゆくえや昨年のホタテ稚貝の育成不良（幼生の採取不良）はもちろんな心配の種ですが、同時に、市内人口が 3 万人を割り込む中で、域内の事業者だけでは経済を成り立たせることが難しくなりつつあるとのこと。例えば、同社では、工場の設備や電気系統の故障・不具合が発生したときに、地元業者にみてもらうことが難しくなり、旭川から専門業者に来てもらわなければならないケースが増えたというところで、こうした法人間の取り引きにおいて、地元だけでは対応が難しくなっていることの裏返しとして、旭川の事業者に対する期待感が高まっていると感じる場面は、これまでも度々ありました。

また、旭川市内の事業者が目を見れば、ある地元小売店では、AI などを生かした省人化投資をテコに生産性を高めれば、人口減少によって商圏が縮む地域に出店しても採算が合うようになると言います。結果として、過疎化地域における「買物難民問題」の解消にも一役買うことができそうです。旭川は、北海道の比較的中央に位置するとしても交通の要衝という地の利があります。実際、当地の多くの方から教えて頂いたとおり、内陸にあ

同時に、大規模な地震災害が少ないということ。旭川の「地の利」です。行政・民間を挙げて広域での BCP 連携が進められていますが、これもネットワークの「ハブ」としての機能を具現化する取り組みとして期待されます。さて、私事で恐縮ですが、今月の転勤により、旭川を離れることす。

そのうえで、こうした旭川の「地の利」や「ネットワーク力」という潜在的な強みは、これまでの物流や卸売業に限った話ではなく、冒頭の例でみたように、人口減少という環境変化が進む局面において、旭川の「ハブ」としての役割は一層重要性が増してきているように思

同時に、大規模な地震災害が少ないということ。旭川の「地の利」です。行政・民間を挙げて広域での BCP 連携が進められていますが、これもネットワークの「ハブ」としての機能を具現化する取り組みとして期待されます。さて、私事で恐縮ですが、今月の転勤により、旭川を離れることす。



【足立祐一（あだち ゆういち）】一九七三年、大分県出身。九州大学経済学部卒。金融市場局企画役、国際局企画役、ドイツ・フランクフルト事務所長、調査統計局地域経済調査課長を経て、二〇二三年、旭川事務所長に就任。